

〈エッセイ〉

学校図書館という文化資源 私の学校図書館史

伊達 摩彦

「僕たちは過去のすべてを背負って生きている。だから、そのすべてを受け入れなければならない」。高校3年生の私は、当時所属していた図書局という部活動（厳密には生徒会外局）の同期と制作した卒業記念同人誌のあとがきに、こう記していた。自分が過去に書いた文章を読み返すのはおもしろい。そうだ、あの頃の私はこんなことを真剣に考えていたのだ。〈現在〉とは、無数の〈過去〉が蓄積した上に成り立つものなのだ。言われてみれば、たしかにそうかもしれない。しかしなぜあの頃の私は、こんなにも〈過去〉の存在感にこだわっていたのだろうか。おそらくそれは、〈過去〉の自分を殺したくなかったから、だと思う。私は、小学3年生の時に幼馴染を病で喪った。スポーツ万能で活発な少年だった彼は、あっという間に天国へ旅立った。身近な人間の死に遭遇した、生まれて初めての体験だった。その体験があったためだろうか、私は、死というもの自分のすぐ近くにあるのだという意識を常に持ち続けてきた。死と隣り合わせの中で、〈過去〉の一瞬一瞬を必死に生き抜いてきた自分「たち」のおかげで、〈現在〉の自分はある。だからこそ、〈過去〉の自分「たち」を、いつまでも心のどこかで生き続けさせたかったのだと思う。それは、有り体に言ってしまうえば「童心を忘れたくなかった」というだけのことなのかもしれないが。

無数の〈過去〉を反映したものが〈現在〉である。そんな観念に半ばとらわれているものだから、他人の発言や行動や思想から、ついその人の生い立ちを推し量ってしまいたくなる。研究においてもそうだ。つまり、内容云々もさることながら、その研究テーマに関心を抱くようになったきっかけや原体験を深掘りしてしまいたくなるの

だ。これは研究という営みにおいてはナンセンスなことかもしれない。情報学環の吉見俊哉先生も述べているように、研究において大切なのは、パーソナル・ヒストリーに基づく個人的「動機」ではなくて学問的「問い」なのだから¹。それでも私は、研究という理性的営為の内奥にある、生々しい人間としての研究者に興味を抱かずにはいられない。アンドロイド研究の第一人者でおられる大阪大学の石黒浩先生は、「あらゆることの基本問題となるのは〈物事の起源〉と〈人間〉しかない」と喝破し、原子分子の世界や宇宙のはじまりといった〈物事の起源〉を追究する物理学のような学問以外はすべて、〈人間〉につながっているのだと説いた²。Humanities とは、人間探究の極致だと思う。私は、「人間とは何か」を知りたくて文学部にきた。目の前にいるあなたのことが、知りたくてたまらないのだ。しかし、もっとも不可思議で知りたくなるもの、それは他でもなく、自分自身だ。

私の研究対象は学校図書館である。学校図書館とは、小学校、中学校および高等学校に設置される図書室（図書館）のことを指す。なぜ私は、学校図書館を研究しているのだろう。それも、あえて文化資源学という領域において。厚かましくも他人のことをあれこれ詮索する前に、自分のことをもっと知る努力をしてみよう。そう思い、本稿の筆を執った次第である。

*

文学部の人間であれば誰しも本というものに対して何かしら特別な思いを持っているのではないかと期待してはいけなことを私は知っている。はるばる北海道から上京し、文科3類→文学部→人文社会系研究科と渡り歩いてきた私は知っている。私が物心ついた時にはすでに、若者の読書離れが巷で叫ばれていたが、それはきっと東大も例外ではないのだと思う。高校生の頃の私は、ほとんど強迫観念に駆られながら本を読んでいた。多くの本を読んでいることが教養ある大人へ仲間入りするためのステータスであり、また、東大はそんな教養あふれる学生に満ち溢れていると信じて疑わなかったからである。今思えば、その時の私はまだ、夏目漱石や三島由紀夫やドストエフスキーを読んでいなくても東大に入学できるということを知らなかったとしか思えない。

それはさておき、今の私は学校図書館を研究していることもあり、本に対してそれ

1 吉見俊哉（2016）『「文系学部廃止」の衝撃』集英社新書，218頁。

2 石黒浩（2009）『ロボットとは何か——人の心を映す鏡』講談社現代新書，36頁。

なりに特別な思いを抱いているつもりだ。しかし幼い頃は、まったく本を読まない子どもだった。小学校低学年の頃なんかはよく両親に「本を読みなさい」と諭されたものだ。姉が幼い頃からの本好きで、いつも家で読書に耽っていたので、それと比較されていた面もあったのだと思う。祖母が遊びに来てくれた折には、祖母に読み聞かせをせがむ姉の真似をして、あまんきみこ『車のいろは空のいろ』や中川李枝子『いやいやえん』などを祖母に読んでもらったりもしたが、それでもやはり一人で黙々と活字に向き合うことはしなかった。とは言え、いくら周りの人間に「面白いから読んでみなよ」と勧められたところで、興味が湧かなかったのだから仕方がない。当時の私にとっては、公園で友達と鬼ごっこをしたり、家で発売されたばかりのゲームに興じたりする方が、ずっと魅力的なことだったのだ。

転機となったのは、家の本棚にあった神沢利子『くまの子ウーフ』をなんとなく手に取ってみた時だろうか。1頁、また1頁とめくっているうち、気がつけばウーフら動物たちの世界に引き込まれていた。初めて自力で最後まで読み通して、「自分にも本が読めた！」という達成感に包まれた。その後、アストリッド・リンドグレーン『長くつ下のピッピ』、ジュール・ヴェルヌ『十五少年漂流記』と続き、次第に児童文学の奥深い森へと足を踏み入れていった。小学4年生の終わり頃のことである。それと呼応して学校の図書室にも足繁く通うようになるのだが、このことはおそらく、ちょうど同時期からクラスメートとの人間関係に綻びが生じ始めたこととも無関係ではあるまい。

反抗期にさしかかる小学校高学年あたりから「グレた」態度を取り始める児童が登場するというのは、多かれ少なかれどの学校にもみられる現象だと思う。ご多分にもれず、私のクラスもそうだった。小学4年生の終盤から一部の男子児童の間で兆しがみえはじめ、小学5年生では一時学級崩壊にまで陥った。私は、荒れた男子集団から爪弾きにされた存在だったので、随分と嫌な思いをさせられた。しかし頼れる大人はいなかった。学級崩壊を経験し、辛い毎日を過ごしていたにも関わらず誰からも手を差し伸べられなかった子どもが、周りの大人を簡単に信用できるはずがあるのか。

そんな私が救いを求めたものこそ、本という世界であり、図書室という空間であった。荒れる前の男子集団と私とは、休み時間に校庭でサッカーを楽しむほどの仲だった。しかしやがて私はその輪に入れなくなり、休み時間の居所は校庭から図書室に変わった。図書室にいただけで、心の底から安心した。書架に並ぶ本に囲まれていると、あたかもそれらの本が鋼の鎧となって外界の敵から身を守ってくれているような気持ちになれた。当時の私にとって図書室は、自分という存在を救済してくれる聖域だった。その聖域で私はたくさんの素晴らしい本と出会った。中でも特に夢中で読んだの

は、ヒュー・ロフティング『ドリトル先生』シリーズだ。動物と会話ができる獣医師のドリトル先生と、数々の動物たちが織りなす愉快的な物語は、私の心をガッチリとつかみ、遠く胸躍るファンタジーの世界へと連れて行ってくれた。これほどまでに想像力と好奇心に満ち溢れた作品を私は他に知らない。それから、梨木香歩『西の魔女が死んだ』も思い出深い一冊で、繰り返し読んで感動的なラストに心が洗われた。ファンタジックでありながら同時にリアリティも感じさせる「梨木ワールド」とも言うべき独特の世界観を生み出す筆力は、見事というほかない。そうしてすっかり図書室の常連となった私は、当然のごとく図書委員会に入ることとなり、小学6年生の時は図書委員長にまでなった。

中学校に進学すると、児童文学を中心に読んでいた小学校時代から一転、背伸びをしたい年頃になった私は少しずつ「大人な」本に挑戦するようになり、国語の授業で使う国語便覧を手がかりに近現代の「名作」に手を伸ばし始めた。村上春樹『海辺のカフカ』、よしもとばなな『TUGUMI』、三浦綾子『塩狩峠』、太宰治『人間失格』、安部公房『砂の女』、アーネスト・ヘミングウェイ『老人と海』、ヘルマン・ヘッセ『車輪の下』など、印象深い作品を数え上げればきりが無い。とりわけ強く印象に残っている作品は、遠藤周作『沈黙』だ。キリシタンが迫害された江戸時代、なぜ神は「沈黙」していたのか——？ タブーとも言える宗教的問いに正面から向き合った本書に大きな衝撃を受けるとともに、文学の持つ力強さに思わず身震いした。また芥川賞受賞作に惹かれ、過去を受賞作品もいくつか読んだ。宮本輝『螢川』、池澤夏樹『スティル・ライフ』、柳美里『家族シネマ』、辻仁成『海峡の光』……。綿矢りさ『蹴りたい背中』を読んだ時は、「これを19歳が書いたのか」と嫉妬に近い感情を抱いたことを覚えている。

中学1年生の途中から、図書局にも入った。私の中学校では図書「委員会」ではなく図書「局」という名称が使われており、各クラス男女1名ずつが選ばれる他の委員会とは違って、全校生徒のうち希望者のみが任意で加入する部活動のような組織だった。入局届に担任教師のサインをもらうべく職員室を訪れた時、担任から「本当は君には生徒会に入ってほしいんだけどね～」と言われた。当時のことを思い出すと、今でも静かな怒りが湧いてくる。図書局（図書委員会）には、しばしば地味なイメージが付きまといがちだ。おそらく担任にもそのイメージがあって、「生徒会が上、図書局は下」とでも考えていたのではないかと思う。担任から投げかけられた言葉に私は嫌悪感を抱き、「自分がやりたいことは図書局活動なのだから、図書局に入って何が悪い」と怒りさえ覚えた。そして、「なにがなんでも図書局を続けてみせる」と意気込み、図書局長にも立候補した。

局長時代、私はどうにかして図書室をもっと魅力的な空間にできないものかとあれこれ考えていた。そんな矢先、図書局の活動をサポートしてくださっていた図書ボランティアの方から薦められた本が、成田康子『みんなでつくろう学校図書館』であった。同書は、札幌市内の高校で30年以上に渡って学校司書を務めてこられた成田康子氏が、勤務先の高校の図書局員とともに実践してきた学校図書館づくりの様子を紹介した新書である。この本の中に登場する札幌南高校の図書館に、私は強く心を惹かれた。同高校の図書館には、生徒がくつろげるソファがいくつも置かれていたり、片隅に囲碁将棋コーナーがあったりと、それまでの私が抱いていた学校図書館のイメージを覆すような、活気に満ちた空間だったのだ。「自分の中学校の図書室も、これくらいワクワクする空間にしたい!」と思った私は、図書室内のレイアウトの変更を提案した。他の図書局員もすぐに賛同してくれた。動線を確保し、以前よりも入りやすくなった図書室は生徒からも好評で、図書局を担当していた先生も「いいね〜!」と絶賛してくれた。そして中学卒業後、私は憧れの図書館がある札幌南高校に進学した。

高校に入学してすぐ、私は図書局に入局した。図書局で過ごした3年間は、実に濃密なものであった。入局して間もない1年生の夏、全国高等学校総合文化祭（総文祭）の図書部門大会に参加するため、はるばる長崎へ飛び、他校の図書局（図書部・図書委員会）と交流する機会を得た。通常、総文祭に図書部門が設けられることはないのだが、開催県の長崎県が学校図書館活動の盛んな県であったため特別に協賛部門として追加され、札幌南高校の図書局が招待されたのだ。棚から牡丹餅とはこのことである。2年生の時は、全国高等学校ビブリオバトルの北海道予選に出場した。遠藤周作『沈黙』を携え、5分間という短いプレゼン時間のうち30秒間を「沈黙」に費やすという奇行に走った結果、まさかの準チャンプ本に選んでいただいた。副賞としてもらったふかふかの大きな泰迪ベアは、今でも札幌南高校の図書館で図書局員たちにモフモフされているらしい。3年生の時は、TED Talksを図書館内で企画した。プレゼンターが全校から集まり、政治や海外医療、生物多様性など、幅広いテーマを持ち寄って熱い議論が交わされた。高校時代の私にとって、学校図書館はもはや単なる聖域などではなかった。多様な本や人との偶然の出会いが誘発され、知的好奇心を刺激し、自らの世界を拡張してくれる、とびっきり豊かな学びの場であった。

*

学校図書館は、文化資源なのではないか。研究対象としての学校図書館と向き合って1年以上が経過したいま、その予感次第に確信へと変わりつつある。学校図書館

と文化の関係については、学術的な議論が十分に積み上げられてきたとは言い難い。これまで学校図書館が論じられてきた学問領域と言えば、図書館情報学や教育学が中心である。学校図書館の役割や性質を鑑みれば、上記の学問領域で研究されてきたというのは至極当然の成り行きであろう。そして、これもまた当然と言ってしまって良いものだろうか、学校図書館が文化資源学という領域において論じられたことはなかった。

しかしながら、そもそも「文化資源」とは何かという根源的な問いに立ち返ってみた時、学校図書館が極めて文化資源学的な対象であり、まさに文化資源そのものであるまいかという期待感を抱かずにはいられないのである。

「文化資源とは何か」ということを考える上で私がもっともよく参照しているのは、文化資源学研究室を長らく牽引してこられた木下直之先生（現・静岡県立美術館館長）による説明だ。木下先生は、「文化資源」という言葉は「資源ゴミ」の資源だと説明している。つまり、ただのゴミとしか認識されていなかったものを「資源ゴミ」として再認識しリサイクルするように、社会の各所に眠るものを「文化資源」として再評価し再利用しようと試みるのが、文化資源学の営みだというわけだ³。

現在、日本全国には 30,000 館を超える数の学校図書館が存在する⁴。一方、公共図書館の数は約 3,000 館である。つまり、学校図書館は公共図書館の 10 倍以上多く存在するのだ。もっとも、両者に求められる役割や利用対象者の範囲、蔵書数、予算規模などは異なるので、館数だけで単純に比較することはできない。だが、本稿を読んでいる方のうち、学校図書館に深い馴染みを覚える人はたしてどれくらい存在するだろうか。小・中・高時代、学校図書館をどれくらい頻繁に利用していただろうか。公共図書館の 10 倍使いこなしていたと胸を張って言えるだろうか。そもそも、学校図書館はどれほど充実していただろうか。

30,000 館以上ある学校図書館のすべてが、質的に十分なサービスを提供できているとは到底言えないのが現実である。学校の図書室は薄暗くて気味が悪いから利用しなかったという人や、そもそも校内のどこにあるか知らないまま卒業したという人も、中にはいるかもしれない。だがそれは、あまりに「もったいない」事態である。学校図書館をゴミに例えるのはいささか憚られるものの、現状として「眠っている」学校

3 木下直之(2003)「創刊の辞 人が資源を口にする時」、『文化資源学』(1)文化資源学会, 1-5 頁.

4 文部科学省が実施している「学校図書館の現状に関する調査」(令和2年度)を参考にすると、2020年度の学校数は小学校・中学校・高等学校・特別支援学校・義務教育学校・中等教育学校をすべて足し合わせて約 37,000 校にのぼる。学校図書館法は、すべての学校に学校図書館の設置を義務付けているので、学校数と同じだけ学校図書館数が存在することになる。

図書館は多い。とすれば、それらを「資源」として再評価し、より良い活用方法を模索していくという文化資源学的な発想は、意義のあるものなのではないか。

私は、文化とは社会のクッションであると捉えている。今般のコロナ禍を契機に、文化は不要不急なものなのかが問い直された。文化ないし文化的権利というものを考えるとき、似た概念として「余暇」「レジャー」等がしばしば引き合いに出されることもあってか、なんとなく文化は余り物のように捉えられてしまう節がある。だが文化は、あってもなくても特に困らないような余り物ではなく、なくてはならないというか、人間が何かしらの生活を営む中で不可避的に存在してしまう代物である。余白のない文章が読みにくいように、背骨のクッションである椎間板の一部が外に飛び出してしまうと椎間板ヘルニアになってしまうように、文化のない生活は窮屈極まりない。仕事や家事や勉強に追い立てられる中で、文化はホッと安らぐ間を創り出してくれる。文化は、我々の生活時間の合間を柔らかく埋めてくれる緩衝材のような存在なのだと思う。

学校図書館もまた、ある意味で私にとっては文化であり、クッションであった。人間関係に疲弊し、心にゆとりのない生活を送っていた私に、束の間の安らぎを提供してくれた。しかし、ただの憩いの場にとどまらないところが、学校図書館のすごいところである。学校図書館は教育設備である。しかし、学校図書館が児童生徒を「教育」してくれるわけではない。学校図書館での読書や学習、交流といった知的な遊戯を通して、他でもなく児童生徒自身が自らを「教育」していくのだ。そう考えると、学校図書館とは、規律・訓練装置として存在してきた学校という強固な近代システムにとって、重要なクッションであるような気がしてくる。学校図書館という文化資源にも、どうやら可能性はありそうだ。